

ランドスケープの変貌

－「国際園芸博覧会」の自然観

井 原 縁

1. はじめに－「国際園芸博覧会」と東アジア

本論でとりあげる「国際園芸博覧会」とは、オランダのハーグに事務局をおく AIPH (The International Association of Horticultural Producers / 国際園芸家協会) が承認する、園芸・造園を対象領域とする博覧会である。AIPH が定める規則に基づき、国際的園芸博覧会 (A 類) と国際性をもつ国内園芸博覧会 (B 類) の 2 種類に大きく分類され、さらに開催形態により表 1 に示す、A1、A2、B1、B2 の計 4 種類に分類されている。特に A1 は、同時に BIE (The Bureau of International Expositions / 国際博覧会条約事務局) が承認する国際博覧会 (万国博覧会) にも位置づけられる大規模なものである。

表 1 国際園芸博覧会の種別一覧

種類	A1	A2	B1	B2
開催頻度	年1回以下 1ヶ国につき10年に1回 BIE(国際博覧会条約事務局)の承認が必要	年2回以下 同大陸では3ヶ月、異なる大陸では3週間以上の期間を置く	年1回以下	年2回以下
開催期間	3ヶ月～6ヶ月	8日間～20日間	3ヶ月～6ヶ月	8日間～20日間
申請	初日の12～6年前	初日の4年前	初日の3～7年前	初日の2年前
参加国	10ヶ国以上	6ヶ国以上		
開催規模	最低面積50ha うち5%以上は外国出展者に確保	最低面積1.5ha うち2000㎡は外国出展者に確保	最低面積 25ha うち3%は外国参加者向けに確保	最低面積6000㎡

AIPH は 1948 年、花卉、植物ならびに景観に関する産業の振興を主目的とし、各国の園芸生産者組織を代表する国際調整機関としてスイスで設立された。当初は西欧主体であったが次第にその範囲を広げ、2011 年現在、参加国はアジア・アフリカ圏も含む 23 ヶ国に及ぶ。その業務の一環として「国際園芸博覧会」の開催を推奨しており、承認ならびにガイドラインの作成を行なっている。

同種のイベント、すなわち園芸・造園を対象領域とする国際的な展示会は、AIPH の承認を受ける以前、既に 1800 年代の中頃から西欧各地で開催されていた。イギリスやベルギーを中心に特権的な園芸協会やクラブが誕生し、花卉、植物およびそれに対する技術を大勢の耳目に供するための展示会を開催、次第に地域や国の領域を超える拡がりをもつようになったのである。ベルギーのアントワープ市で現在も 5 年ごとに開催されている FLORALIES の実質上の始まりは 1939 年。ドイツの各都市を 2 年ごとに巡回し開催されている BUGA (Bundesgartenschau / 連邦園芸博覧会) は 1951 年のハノーバー開催が第 1 回だが、その起源は 1869 年に遡る。

従って、AIPH により承認された「国際園芸博覧会」には当初、それ以前から実態としては存在していたものも、少なからず含まれていた。先ほど例に挙げたアントワープの FLORALIES や BUGA (10 年に一度は A1 クラスの IGA が開催される)、さらに 1956 年からフランスのナント市で 5 年ごとに開催されている Florales Nantes はこれに該当する。新しく加わったものも、基本的にこれら旧来のものと同じ連続性・周期性を有するものが多かった。AIPH 承認による第 1 回の「国際園芸博覧会」は 1960 年、オランダ・ロッテルダムで開催された Floriade だが、これはその後、10 年周期でオランダ各地の都市を巡回し開催され続けることとなる。1966 年以降、5 年周期で開催され続けているイタリア・ジェノバ市の Euroflora もまた同様である¹⁾。

このように、発足当初は地理的にも内容的にも西欧の伝統に強い影響を受けていた AIPH 承認の「国際園芸博覧会」であるが、時代の流れと共に、次第に新たな傾向がみられるようになる。表 2 に A1 クラスの大規模な国際園芸博覧会の開催履歴を、表 3 に A2、B1、B2 クラスの小規模な国際園芸博覧会の

1990 年以降の開催履歴を併せて示す。表 2.3 共に、アジア圏での開催をグレーで明示している。これをみると、アジアで初めての国際園芸博となった 1990 年「大阪国際花と緑の博覧会」以降、日本、中国、台湾、韓国、フィリピン、タイと、アジア諸国での開催が目立って増えていることが分かる。特に中国は、今後も引き続き 2014 年、2016 年と A2/B1 クラスの開催を予定しており、国際園芸博というものの開催に何かしらの強い価値を見出していることが推測される。

では、これら新たにアジア圏で増加している国際園芸博は、従来の西欧由来のそれと同質のものなのだろうか。そもそも「博覧会」という存在が 19 世紀的西欧近代の精神性を代表するものがあることは、既に多くの識者が指摘しているところである²。先述したように、その成り立ちからして園芸博覧会もまた、西欧社会が生み出した新たな「博覧会」の一種であり、その根本的性格に大きな違いはないであろう。しかし、それが 20 世紀のアジア圏において何ら変化のない形で受容され、かつ 21 世紀となった現在に至るまで機能し続けているとは考えがたい。いうまでもなく、アジア諸国は西欧とは全く異なる風土に根差した自然観を有し、それに基づく景観を構築してきた歴史をもつ。そのアジア諸国が、「自然」を主題とした西欧由来の園芸博覧会を、いかに受容し、自らの社会のなかに—むしろ積極的ともとれる姿勢で—位置づけているのか。

この問いについて、アジア諸国、特に東アジア諸国においてこれまでに開催された「国際園芸博覧会」の実態を、その背後に潜む自然観に留意しつつ考えていきたい。博覧会において、その自然観が最も端的に表れるポイントは、次の 2 点であろう。

- ①博覧会開催「前」と「後」のランドスケープの変貌（特に自然環境の変化）
- ②開催時の会場デザインにおける「自然」の扱いかた

本稿では、紙幅の都合上①の視点に限定して論じることとする。以下まず基本情報の収集・整理を行ない、特に「大阪国際花と緑の博覧会」の事例に焦点を据える。併せて、それ以降に開催された一連の東アジア諸国における「国際園芸博覧会」の自然観についても言及する。このプロセスにおいて、

表 2 A1「国際園芸博覧会」開催履歴

開催年	種別	開催国	開催都市	名称
1930	A1	オランダ	ロッテルダム	Floriade
1963	A1	ドイツ	ハシフルグ	IGA(International Garden Exhibition)
1964	A1	オーストリア	ウィーン	International Horticultural Exposition
1969	A1	ハリ	ハリ	International Horticultural Exposition
1972	A1	オランダ	アムステルダム	Floriade
1973	A1	ドイツ	ハシフルグ	IGA(International Garden Exhibition)
1974	A1	オーストリア	ウィーン	International Horticultural Exposition
1980	A1	カナダ	モントリオール	International Horticultural Exposition
1982	A1	オランダ	アムステルダム	Floriade
1983	A1	ドイツ	ミンヘン	IGA(International Garden Exhibition)
1984	A1	イギリス	リバープール	International Garden Festival
1990	A1	日本	大阪	International Gardens and Greenery Exposition(大阪国際緑の博覧会)
1992	A1	オランダ	ハーグ・スーターマ	Floriade
1993	A1	ドイツ	シュトゥットガルト	IGA(International Garden Exhibition)
1999	A1	中国	昆明	International Garden Festival(昆明世界園芸博覧会)
2002	A1	オランダ	ハーグ・スーターマ	Floriade
2003	A1	ドイツ	ロストク	IGA(International Garden Exhibition)
2006/07	A1	タイ	チェンマイ	Royal Flora Ratchaphruk
2012	A1	オランダ	フェンロー	Floriade

表 3 A2,B1,B2「国際園芸博覧会」開催履歴(1990～)

開催年	種別	開催国	開催都市	名称
1990	A2	ベルギー	ゲント	FLORALIES1990
1991	A2	イタリア	ジェノバ	Euroflora
1991	B1	ドイツ	ドルトムント	BUGA(German Federal Horticultural Show)
1994	A2	フランス	ナント	Florales Nantes1994
1995	B1	ドイツ	コフス	BUGA(German Federal Horticultural Show)
1995	A2	ベルギー	ゲント	FLORALIES1995
1996	A2	イタリア	ジェノバ	Euroflora
1997	B1	ドイツ	ケルゼンキルヒン	BUGA(German Federal Horticultural Show)
1997	B2	カナダ	ケベック	Quebec en Fleurs int.
1998	—	フィリピン	—	Exhibition at Florikultura '98 (Philippines International Garden Festival)
1999	A2	フランス	ナント	Florales Nantes1999
1999	B1	ドイツ	マクデブルク	BUGA(German Federal Horticultural Show)
2000	A2	ベルギー	ゲント	FLORALIES2000
2000	A2/B1	日本	滋賀	JAPAN FLORA2000(滋賀博覧会)
2001	A2	イタリア	ジェノバ	Euroflora
2001	B1	ドイツ	ボナム	BUGA(German Federal Horticultural Show)
2002	A2	韓国	安眠島	Korea Floritopia2002(安眠島国際園芸博覧会2002)
2004	A2	フランス	ナント	Florales Nantes2004
2004	B2	日本	浜松	Pacific Flora2004(浜名湖博覧会)
2005	B1	ドイツ	ミンヘン	BUGA(German Federal Horticultural Show)
2005	B2	フランス	デジダン	Florissimo
2005	A2	ベルギー	ゲント	FLORALIES2005
2006	A2/B1	中国	瀋陽	Shenyang International Horticultural Exhibition(中国瀋陽世界園芸博覧会)
2006	A2	イタリア	ジェノバ	Euroflora
2007	B1	ドイツ	ケルゼンキルヒン	BUGA(German Federal Horticultural Show)
2008	B2	カナダ	ケベック	Quebec en Fleurs int.
2008	B1	カナダ	ケベック	Les Jardins des Florales int.
2009	A2	韓国	安眠島	Korea Floritopia2009(安眠島国際園芸博覧会2009)
2009	B1	ドイツ	シュヴァーテン	BUGA(German Federal Horticultural Show)
2009	B2	日本	浜松	Hamamaki Flower & Garden Fair(浜名湖フラワー&ガーデンフェア2009)
2009	A2	フランス	ナント	Florales Nantes2009
2010/11	A2/B1	台湾	台北	Taipei International Flora Exposition(台北国際園芸博覧会)
2010	A2	ベルギー	ゲント	FLORALIES2010
2011	A2/B1	中国	西安	Xian International Horticultural Exhibition(西安世界園芸博覧会)
2011	B1	ドイツ	コペンハーゲン	BUGA(German Federal Horticultural Show)
2011	A2	イタリア	ジェノバ	Euroflora
2011/12	A2/B1	タイ	チェンマイ	Royal Flora Ratchaphruk
2012	A2	スペイン	バレンシア	Floralia

同じアジア圏に属するといえども、個々の国々において明らかな違いがみえてくることが推測される。そのような多様性の解明もまた、本論の重要な目的のひとつである。

2. 廃棄物処分場からの出発—大阪花博

(1) 「鶴見緑地」という場所

東アジアで AIPH の承認を受けた「国際園芸博覧会」が開催されているのは、日本、韓国、台湾、中国の4ヶ国である。まず、A1 クラスの国際園芸博覧会だが、現時点では「大阪国際花と緑の博覧会（以下、大阪花博と称す）」と「昆明世界園芸博覧会（以下、昆明園芸博と称す）」の2つのみである。表4にこれら A1 クラスの国際園芸博覧会の内容を、いずれも会場敷地の前後変化（表中グレーで明示）に留意しつつ整理した。このうち 1990 年に開催された大阪花博は、その後アジアで開催される一連の「国際園芸博覧会」の契機となった、最初の博覧会であった。

表 4 東アジア A1 「国際園芸博覧会」概要

名称	大阪国際花と緑の博覧会 (花の万博、大阪花博、EXPO'90)	昆明世界園芸博覧会
会期	1990.4.1-9.30 (183日間)	1999.5.1-10.31 (184日間)
メインテーマ	自然と人間の共生	人と自然-21世紀への行進
入場者実績	約2,312万人	約940万人
会場	大阪府鶴見緑地(大阪市・守口市)	中華人民共和国雲南省昆明市
敷地面積	約140ha	約218ha
敷地概況	もとは蓮などが自生する湿地帯。1970年地下鉄工事の残土や建築廃材、家庭ゴミにより埋立て、都市公園「鶴見緑地(計画面積約162ha)」として造成。1972開園	昆明市北東郊外、「金殿風景名勝区(鳴鳳山)山中の道教寺院群を中心とする一帯の景勝地。国家級森林公園にも指定)」に連なる。採石場・煉瓦製造所・ゴミ捨て場として利用されていた土地。
跡地	都市公園「花博記念公園鶴見緑地(約120ha)」	「昆明世界園芸博覧園(約218ha)」
運営主体	財団法人国際花と緑の博覧会協会	中国昆明世界園芸博覧会組織委員会

大阪花博の会場となったのは、大阪市と守口市にまたがる都市公園「鶴見緑地」である。この地一帯は、もとは大小の池沼や小川が走り、多くの蓮が自生する低湿地であった。そのうち約 162ha を大阪市が防空緑地³として都市計画決定し、ここに初めて「鶴見緑地」という空間が顕在化する。しかし、戦後は大半が民間に払い下げられ公園化は中断、名ばかりの状態がしばらく

続くこととなる。本格的な整備が施されるようになったのは、1960年代に入り、周辺地域の急激な住宅地化・工場用地化に伴う環境保全上の必要性に応じたことであった。整備事業として最初に着手したのが、中断していた一帯の土地買収である。その後ほどなく、当時不足していた大阪市の「廃棄物処分場」としての機能も新たに付与され、総量約290万㎡の廃棄物を大阪万博時の地下鉄添削工事で発生した残土約600万㎡で交互にサンドイッチにしていく工法（ゴミー層の厚さ3m、残土の厚さ2m）で⁴土地が造成されることとなる。造成された20～45mの丘陵地に植栽を施し、そのうえに屋外レクリエーション施設を配置することが計画されていた。

廃棄物の埋め立てと造成が完了した土地は、植物の生育には極めて悪条件であった。土壌が高い粘土質で植栽に不適であることに加え、埋め立てたゴミの発酵分解によるメタンガスの発生や地盤沈下など、実際の整備過程では次々と難題にぶつかることとなる。しかし、これらの難題を技術によって次第に克服し、1972年に広域公園⁵として開園。大阪花博の開催が決定する1980年代中頃には、大小の池と人工の築山を中心とした起伏に富む造成地のなかに、世界の森（34ha）、子供の森（7.3ha）、市民園芸村（6.9ha）大芝生（3ha）などの多様な屋外レクリエーション施設が設置され、大阪市民の貴重な自然との触れ合いの場⁶として大いに人気を博すまでになっていた。図1に、当時の鶴見緑地の平面図を示す。特に人気を集めたのは1983年4月に園内大池の北東部にオープンした「世界の森」で、約34haの丘陵地に9パターンの世界の森林景観を象徴的に再現したものである。オープン後半月間でのべ56万4千人、最も多い日には12万人にも上ったという入場者記録⁷からも、その人気のほどを窺い知ることができる。

では、このような鶴見緑地が、何故「国際園芸博覧会」の会場に選ばれたのか。そもそも大阪花博は、1980年代に入り、各々の意図のもとに動き始めた大阪市と国、双方の構想が合致したことで本格化したという経緯をもつ。まず大阪市は、市制100周年記念事業調査会を中心に、1989年の市制100周年記念に相応しい事業の検討を進めていた。1981年に市職員より募ったアイデアは1000件764項目に及び、それをベースとして1983年には「健



図 1 鶴見緑地平面図（大阪花博開催決定時）

出典：大阪市（1991）：国際花と緑の博覧会と大阪市：大阪市、70pp

康」「美」「技術」「交流」「その他」の5部門による記念事業の実施が決定する。このうち「交流」部門に該当するメインイベントとして、同時期の1982年にオランダのアムステルダムで開催されたFloriadeをモデルとした博覧会の構想が浮上、「花の博覧会」という言葉のもとに独自のプロジェクトチームを組み、その内容をより具体化していった⁸。

鶴見緑地が会場となることは、既にこの初期検討段階で確定しており、1983年の段階で「花の博覧会」基本構想のみならず会場および周辺アクセスの整備プランまで策定されていた。大阪市編集の公式記録『国際花と緑の博覧会と大阪市』によると⁹、この「花の博覧会」の会場が鶴見緑地に決定した直接的要因は次の3つであったという。

- ①会場に相応しい場所を新しく造成するのは物理的に不可能であったこと
- ②日本の都市公園でも最大級であり、そのスケールのもつ環境・景観を十分に活かせること
- ③都市の廃棄物を緑に変えたという歴史を有すること

1984年に大阪市が作成した「花の博覧会」基本構想では、その基本理念に「都市の廃棄物を緑に変えるという環境対策の記念碑である鶴見緑地で花をテーマに開催することは、新しい都市文化の創出と国際都市文化を進めている大

阪にとって、きわめて意義深い」¹⁰ という記述がみられる。さらにこれに続く基本方針には「都市の緑と生活のかかわりを探り、新しい街づくりのあり方を模索する」¹¹ という言葉が掲げられている。これは、トラック 215 万台分の膨大な廃棄物が埋め立てられた土地に、技術力をもって自然を植え付けた「鶴見緑地」という公園が、都市環境問題に対する有意なメッセージ性をもつとして高く評価されていたことを示す証左といえよう。

一方で国は、時の中曽根内閣が公約に掲げた「緑の三倍增構想」の一環として、建設省（現国土交通省）・農林水産省・通商産業省（現経済産業省）を中心に「緑の国際フェスティバル」の開催を検討していた¹²。当初はその開催地に首都圏に隣接した地域をイメージしており、それを受けて千葉県浦安市、埼玉県川口市、静岡県掛川市、熊本県浦安市の働きかけも行なわれていたという¹³。しかし、大阪市の着実な進行状況が功を奏し、1985 年、既に計画していた内容をさらにスケールアップした「花と緑の国際博覧会」を大阪の鶴見緑地で開催することが正式に閣議決定され、AIPH ならびに BIE の承認を得るべく動きが加速していく。結果、両者の正式承認を得、大阪市による原案の 1 年後となる 2000 年に¹⁴ アジアで初めての「国際園芸博覧会」として「大阪花と緑の国際博覧会」が開催されるに至るのである。従来の西欧主体の国際園芸博覧会開催において、ゴミの埋め立て地を会場とするという発想はまずみられず、おそらく今回が初めてのケースであったと推測されるが¹⁵、「国際園芸博覧会」承認のプロセスにおいても「鶴見緑地」の存在はマイナスどころかむしろプラスに働いた。AIPH のロベール・マティス会長は、1986 年に現地を視察した際「見事に整地されており芸術的だ。起伏に富み、大阪市内が見渡せて素晴らしい。地理的にもかなったところで博覧会は成功したも同然である」と高く評価し、BIE への承認申請時にも強く推薦したという¹⁶。

（２）「鶴見緑地」から「花博記念公園鶴見緑地」へ

さて、花博開催後のこの地のランドスケープは、どのように変貌したのか。会場計画の段階で将来再び都市公園として利用することが念頭に置かれてい

たこともあり¹⁷、跡地は都市公園「花博記念公園鶴見緑地」として再整備され、現在に至っている。図2に大阪花博の会場整備基本計画図を、図3に会場跡地の整備基本計画図をそれぞれ示す。標高の高い大池北東部を「山のエリア」に、平坦な西南部を「街のエリア」に見立て、両者をつなぐ空間「野のエリア」として中心部の大池を含む広がりをつめた花博会場に比すると、図3の跡地の空間構成は、むしろ花博開催前の図1の段階に近い。花博会場では敢えて「エリア」と称し、この3エリアが連続的かつ重層的につながっていく景観づくりを意識したが、造園学者の清水正之が「花の万博での融通性をもたせたエリアという考え方は大区分では踏襲されなかった」¹⁸と指摘するように、跡地計画では区画限定的なゾーニングの概念が適用されている。

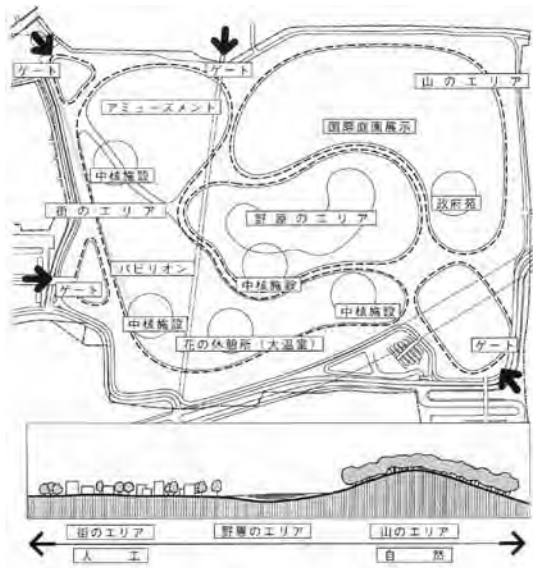


図2 会場整備基本計画図

出展：大阪市（1991）：国際花と緑の博覧会と大阪市：大阪市、71pp

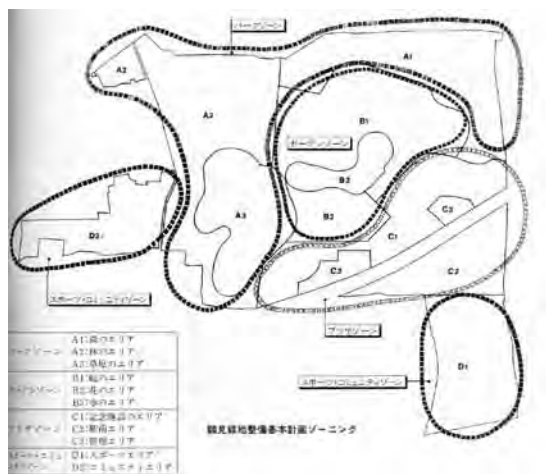


図3 会場跡地整備基本計画図

出典：大阪市（1991）：国際花と緑の博覧会と大阪市：大阪市、307pp

個々の景観要素をみると、会場整備に伴い新設された建築物のうち、大池西南部のパビリオン群が全て撤去され緑地に帰し、新設された「咲くやこの花館」「国際展示水の館」など主要建造物の幾つかが記念碑的な意味で存置されている。一方、自然物は、会期中最も人気を集めた花栈敷・花の谷・国際庭園がガーデンゾーンのなかに位置づけられ、場内随所にみられた装飾的な花や緑の展示は大半が撤去された。建築要素・自然要素共に、有意性を認められた一部のみが存置され、新たな公園のゾーニングのなかに組み込まれたのである。結果、花博開催前の姿よりも、非常に細分化された区画の集合体になっていることが指摘できる。

図1に示した花博開催前の鶴見緑地に設置されていた屋外レクリエーション施設のうち、跡地整備後の「花博記念公園鶴見緑地」でも変わらないものは、開催前の環境に復元整備された中心部の大池のみである。「世界の森」は四季の変化を楽しめる「ふるさとの森」を加えた緑豊かなパークゾーン「森のエリア」として再整備され、「子供の森」は、自然体験観察園などを加えたプラザゾーンの「記念施設のエリア」に、「大芝生地」は花博の遺産である花栈敷・花の谷を含むガーデンゾーンの「花のエリア」に、「市民園芸村」

は廃止されプラザゾーンの一部に、「青少年の森」は多様な自然とのふれあいやレクリエーション活動が可能なパークゾーンの「林のエリア」および「草原のエリア」に、「乗馬苑」は北東部に移動し「コミュニティエリア」に、各々大きな変貌を遂げた。

このような跡地整備のあり方には、花博の開催直後に出された2つの提言が大きく影響している。ひとつは大阪市が設置した「鶴見緑地みらい懇話会」による提言¹⁹、もうひとつは国が設置した「国際花と緑の博覧会基本理念継承懇談会」による提言²⁰である。前者は今後の鶴見緑地が目指すべき目標像を、「花と緑と人間生活のかかわりをとらえ、21世紀へ向けて潤いのある豊かな社会の構築を目指す」という大阪花博の基本理念を受け継ぐものとして「花と緑と人が一体となる魅力に富んだ生活文化創造の場」と定めた²¹。後者もまた、『花の万博』の基本理念を継承する公園」と明記したうえで、基本的な施策の方向性を以下のように示している（傍点筆者）。

単なる都市公園としての復元にとどまらず、うっそうたる樹木と芝生、水、花に囲まれた公園とすることを基調としながら、世界各国から出展された国際庭園の活用を図りつつ、歴史的にも世界的にもモニュメンタルな都市公園として、「花の万博」の基本理念を継承し、それを全国的かつ国際的に末永く発信していく拠点として活用する必要がある。²²

ここから読み取れるのは、かつての鶴見緑地にその基盤を置きつつも、花博開催によって強化された「花と緑」という要素を、その後もイメージ・実体ともに継承することを第一義とし、そのあり方に21世紀の社会の理想像を投影していこうとする強い意志である。

ここで考えたいのが、大阪花博とその跡地整備に一貫してみられる、「花と緑」に対する強い意識の背後にある自然観である。大阪花博が目指したのは、「花と緑」を手段として、自然と共生する社会の理想像をいかに演出・展示するか、であった。そしてその理念を継承すべく、跡地整備においても「花と緑」という要素をイメージ・実体ともに残すことに重きが置かれている。

ここで意識されているのは、その土地に根差した、地域的な固有性をもつ自然ではない。理想的な都市環境の調整装置、かつ都市生活における貴重な文化装置としての、記号化された「自然」である。このような捉え方は、それまで西欧の専門領域であった国際園芸博覧会にも共通するものであるが、同時にそこには根源的な違いも存在している。

西欧の国際園芸博は、計画当初から会場のみならず広域的な都市計画や景観・環境整備事業と連携して開催されているケースが多い。大阪市が花博の初期検討段階で参考にしてしていた1982年のアムステルダム Floriade でも、54haの公園を花いっぱい埋めると共に、関連事業として地下鉄や住宅地などのインフラ整備が明確に打ち出されていた²³。特に環境政策との連携が強いドイツでは、特に1980年代から郊外の放置された谷間の自然風景の修復と保全をテーマに掲げるなど当該地域の自然生態と庭園文化との融合がみられるようになり、このようなスタイルがイギリスをはじめとする他の国々にも影響を与えている²⁴。西欧では、人々の生活文化として「花」という存在が定着している。いわば最も身近な自然が「花」であり、その背後には、色鮮やかな花を基調とし続けてきた庭園文化の厚みがある。それゆえ、園芸博覧会、さらに国際的規模の園芸博覧会が生まれ、その会場が色鮮やかな花で彩られ、併せて都市の景観・環境整備が進むのもまた自然な流れと捉えることができる。これらの行為の基盤には、現在に至るまで一貫して人々の生活に根付いている、確固たる花の文化があり、その意味において西欧の園芸博覧会は（国際的規模のものも含め）「日常におけるハレの空間」とみなすことができる。

日本において、その庭園文化の中心であり続けたのは花ではなくむしろ石であり、西欧ほどの花に対する一貫した強い愛着はみられない²⁵。しかし、西欧にみられる色鮮やかな原色の花への嗜好とは異なるが、古代より何気なく咲く野の草花を歌に詠み、庭園に取り入れてきた歴史を有し、特に江戸期の花卉園芸文化は、庶民の末端にまで普及し大隆盛を極めたことも明らかになっている。この時期の日本の花卉園芸文化については、植物学者の中尾佐助が以下のように評している。

江戸期の日本の花卉園芸文化はアジアの花卉園芸文化の第2次センターとして、日本の特色を発揮して、大発展をした。それは中国という第1次センターを凌駕し、また西ヨーロッパに優るとも劣らずというより、一時期、たとえば江戸中期の元禄時代などには、西ヨーロッパより先進していたと評価できるものである。江戸期の日本の花卉園芸文化は全世界の花卉園芸文化の中で、もっとも特色のある輝かしい一時期である。しかし明治に入ると、それは衰えはじめ、築きあげられた特色は忘れられ、その文化の大部分は社会的に埋没しつつある²⁶。

大阪花博で、このような歴史的背景が考慮されなかったわけではない。「花の江戸東京館」を始めとするパビリオンや庭園展示において、日本の伝統的な花の文化のあり方が、非常に工夫を凝らした形で展示されていた。さらに会場全体の基本骨格として、山～野～街という日本の典型的な風土を見立て、中心部に広がる野のエリアには、色鮮やかな花々と共に日本の懐かしい山里の景観を模した「花の谷」を作り上げていた。これらの営為は、日本にもかつて築かれていた、独自の花を愛でる文化を来場者に見せることにより、「花と緑」を再び西欧にも劣らぬ身近な自然として取り戻そうという意図によるものであろう。しかし、それでもやはり、かつて築かれていた花の文化は、前掲文において中尾が最後に指摘しているように、現代の我々にとってはあくまで遠い存在であり、生活に沁み込んだ文化とはなり得ていない²⁷。その意味において大阪花博は、西欧の園芸博の「日常におけるハレの空間」とは異なり、「非日常の虚構空間」であったといえる。

このような大阪花博の虚構性は、その会場が他ならぬ「鶴見緑地」であったことも大いに関係している。戦後日本の経済発展が生んだ代表的な環境問題「廃棄物問題」解決の場として、既存の自然環境を大幅に改変し、そこに築かれてきた人との関係性²⁸をゼロベースにし、廃棄物を埋め立て、人間の技術力をもって緑化した空間。既にその段階で、公園「鶴見緑地」として区切られた内部空間は、周囲の環境とは切り離された、一種の虚構性を有し

ていたといえる。しかし、造成後 20 年弱の月日が経過するなかで、この地に人為的に導入された新たな自然もまた、屋外レクリエーションや貸農園など、新しい形で人々との関係性を築きつつあった。大阪花博は、再びそれを（ゼロベースとはいわないまでも）見直し、また新たに「花と緑」という記号化された自然をこの地に大量導入したのである。それは同時に、その新しい自然と人との、今までにない「理想的な」関係性の構築を強く促すものでもあった。大阪花博の会場「鶴見緑地」に付随する虚構性は、この流れのなかでさらに強化されることとなる。そしてそれを代表する景観要素は、跡地整備においても、部分的にはあるが着実に受け継がれ、花博開催後のこの地は、再び新しい自然との関わり方を提示された、多様な施設の集合体である新規公園「花博記念公園鶴見緑地」となったのである。

（３）２つの国際博覧会とその自然観

園芸博覧会の主題は「自然」であるが、日本を含め東アジアにおいて、非日常の遠い自然ではなく、身近な自然－その土地に根差した、地域固有の自然環境と、そこで築かれてきた人との関係性－を強く意識している園芸博は、その後現れるのだろうか。ちなみに、これまでに日本で開催された園芸博でない BIE 承認の「国際博覧会（万国博覧会）」をみると、そのような意識がみられるのは、2005 年の愛知万博が初めてである。表 5 に、日本で開催された大阪花博以外の国際博覧会（万国博覧会）の内容を、これも会場敷地の前後変化（表中グレーで明示）に留意しつつ整理した。

既に 1950 年代末から人工の街「千里ニュータウン」として開発が進んでいた丘陵地を対象に、自然環境をほぼ一掃する大規模な土地造成を行ない、企業パビリオンが集積する「未来都市」を演出した会場を築き、開催後は一帯を新しい樹林地に変えた大阪万博。サンゴ礁が広がる豊かな漁場に接した臨海部を大規模な土地造成により開発し、その上に海洋開発を旨とした近代的施設と人工ビーチ、さらに海上都市「アクアポリス」により構成される会場を建設し、開催後は観光レジャーを意図した大規模公園に整備した沖縄海上博。1970 年代より最先端の科学技術研究の拠点として「つくば研究学園都市」を建設するべく丘陵地の里山を大規模開発し、映像システムや無数の

表5 日本「国際博覧会（万国博覧会）」概要

名称	日本万国博覧会 (大阪万博、EXPO'70)	沖縄国際海洋博覧会 (沖縄海洋博、海洋博)
会期	1975.3.15-9.13(183日間)	1975.7.19-1976.1.18(183日間)
メインテーマ	人類の進歩と調和	海—その望ましい未来
入場者実績	約6,422万人	約349万人
会場	大阪府千里丘陵	沖縄県名護市本部半島
敷地面積	約330ha	約100ha
敷地概況	自然丘陵と千里ニュータウンが接する境。 竹林(孟宗竹)が生い茂り、谷間には田畑が 続き、大小600近い池が散在する里山	良好な漁場と海岸沿いのギンネム(ネムノキ科 落葉低木)が群生する原野・石山
跡地	すり鉢状に造成・覆土し、約250種・60万本の 植樹により「万博記念公園(約264ha)」に整備	「国営沖縄記念公園海洋博覧会地区 (海洋博公園/約72ha)」に整備。 アクアポリス(会場から約200メートルの沖合に 建設されていた博覧会のメイン施設)は、 1993年閉館、その後撤去

名称	国際科学技術博覧会 (科学万博、つくば'85)	2005年日本国際博覧会 (愛・地球博、愛知万博)
会期	1985.3.17-9.16(184日間)	2005.3.25-9.25(185日間)
メインテーマ	人間・居住・環境と科学技術	自然の叡智
入場者実績	約2,033万人	約2,205万人
会場	茨城県筑波科学学園都市	愛知県名古屋市長久手市東部丘陵 県営公園「愛知青少年公園」+「海上の森」
敷地面積	約102ha	約173ha(長久手会場158ha、瀬戸会場15ha)
敷地概況	もとは筑波山麓南部にアカマツ・コナラなどの 雑木林や畑地が広がる里山。 1970年代～科学技術庁主導の 「研究学園都市」計画により開発	【長久手会場】 1970年開園の一般県営公園「愛知青少年公園 (200ha)」。温水プール・スケートリンクなど スポーツ・文化施設が多数設置。 2002年博覧会準備のため閉園。 【海上の森】 名古屋市東部に広がる約530haの緑地。 豊かな森林(シデコブシ、サクラバハハンノキなど 貴重な植物や、オオタカなど多様な動物が生息)に 農地や水辺がある典型的な里山。 当初、万博の主会場に設定されていたが、 反対運動によって、改変面積は 当初計画の100分の1以下に縮小
跡地	主会場跡地の大半が、工業団地 「筑波西部工業団地」に転用。 Dブロック跡地に「科学万博記念公園(約14ha)」	【長久手会場】 県営都市公園「愛・地球博記念公園 (モリコロパーク/約194ha)」 【海上の森】 瀬戸会場ゲート近くのモニュメントを中心に 都市公園(瀬戸市街区公園) 「瀬戸万博記念公園(愛・パーク/約1.3ha)」整備。 また、旧瀬戸愛知県館を中心に 「海上の森」保全・活用の拠点施設、 県営「あいち海上の森センター (ムーンアカデミー/約5ha)」が整備。 森全体を、県・県民・企業等多様な主体で管理・ 保全・活用していくための取り組みを展開中。

P C 端末、ロボットの饗宴による会場を築き、跡地の大半が工業用地として再開発された科学万博。このうち 2005 年に開催された愛知万博だけは異質である。紆余曲折を経て、当初会場に予定されていた丘陵地「海上の森」はサブ会場に変更、面積も大幅に狭められ、主会場は既存の県営公園となった。そのうえで、環境アセスメントに基づき環境負荷に最大限配慮した規模・形態の会場を築き、開催後は再びもとの環境に戻すことに力が注がれた。そのみならず、特に「海上の森」に関しては、従来以上の保全・活用の取り組みが現在に至るまで積極的に行なわれている。

社会学者の吉見俊哉は、この戦後日本の 4 つの万博に焦点を当て、その実態を解明した著書『万博幻想』において、1970 年代以降の日本における万博と地方博が、いずれも 1975 年に開催された大阪万博の強烈なイメージに影響されていることを指摘したうえで、戦後開発主義と深く結びついてきたその認識²⁹が、「万博と会場周辺の自然との困難な関係」³⁰を生み続けてきたことを浮き彫りにしている。大阪万博開催の背後には 1964 年の東京オリンピックの関西版として、広範なインフラ整備を含む多大な経済効果への期待が、沖縄海洋博の背後には観光利用を意図した沖縄本島北部開発の基盤整備への期待が、科学万博の背後には既に進行中の「つくば研究学園都市」建設の周知と促進が、そして愛知万博にも、その構想当初は「新住計画」と呼称された愛知県東部丘陵の大規模住宅開発の先行プロジェクトとしての効果が期待されていた。しかし 2005 年の愛知万博では、「そのような万博についての市民サイドの受け止め方」が 1990 年代以降決定的に変化したゆえに多大な影響力をもち、当初の計画を根本的に修正させるまでに至ったという³¹。

大阪花博は、このような万博に一貫して作用してきた開発主義とは、いささか種を異にする。イベント開催により経済を含む地域振興効果を期待する、という基本構造は同じだが、その内容は、従来型の開発を基盤とするものではなく、既存のインフラをいかに「(心の)豊かさ」「潤い」「美しさ」といった形容詞で充実させるかという点を重視したものであった³²。大阪花博の構想が浮上した 1980 年代は、開発至上主義がもたらした負の遺産として環境問題が顕在化し、それに対する配慮の必要性が広く共有されはじめた時代であ

る。このような時代状況のなかで、「自然」を主題とする日本初の国際園芸博であった大阪花博は、一般的な万博とは異なるその専門性ゆえに、「環境万博」愛知万博に先んじて、当時の行政がイメージする「理想的な」環境配慮の形が象徴的に映し出される空間になったと考えられる。それゆえ、ここで意識される「自然」とは、あくまで象徴的な存在であり、土地に根ざした固有の自然環境への意識は薄かった。「海上の森」という特定の自然環境への市民反対運動が方向を決定づけた愛知万博のほうが、むしろその意識は高かったと指摘できる。

3. 東アジア「国際園芸博覧会」とその自然観

(1) 昆明園芸博とその後—中国

では次に、大阪花博開催以降東アジアで開催された一連の「国際園芸博覧会」の自然観についてみていくこととする。

大阪花博と並ぶ A1 クラスの国際園芸博、「昆明園芸博」は、1982 年のアメリカ・ノックスビル博覧会を端緒に海外の博覧会に再び参加するようになった中国が、自国で初めて開催した BIE 承認の「国際博覧会」でもあった。当初開催地は北京を予定していたが、急激な人口集中が進む北京では用地確保が難しく、さらに決定直後に北京市幹部を巻き込む大掛かりな不正事件が判明したこともあり、1995 年に中国西南部に位置する雲南省の省都、昆明

表 6 (表 4 に同じ) 東アジア A1 「国際園芸博覧会」概要

名称	大阪国際花と緑の博覧会 (花の万博、大阪花博、EXPO'90)	昆明世界園芸博覧会
会期	1990.4.1-9.30(183日間)	1999.5.1-10.31(184日間)
メインテーマ	自然と人間の共生	人と自然-21世紀への行進
入場者実績	約2,312万人	約940万人
会場	大阪府鶴見緑地(大阪市・守口市)	中華人民共和國雲南省昆明市
敷地面積	約140ha	約218ha
敷地概況	もとは蓮などが自生する湿地帯。1970年地下鉄工事の残土や建築廃材、家庭ゴミにより埋立て、都市公園「鶴見緑地(計画面積約162ha)」として造成。1972開園	昆明市北東郊外、「金殿風景名勝区(鳴鳳山山中の道教寺院群を中心とする一帯の景勝地。国家級森林公園にも指定)」に連なる。採石場・煉瓦製造所・ゴミ捨て場として利用されていた土地。
跡地	都市公園「花博記念公園鶴見緑地(約120ha)」	「昆明世界園芸博覧園(約218ha)」
運営主体	財団法人国際花と緑の博覧会協会	中国昆明世界園芸博覧会組織委員会

市に変更となる。これには当時の國務院副総裁であった李嵐清（のちに中国昆明世界博覧会組織委員会の主任も務める）の影響が大きく、雲南省視察の際に気候や植物資源、観光資源の豊かさを高く評価し、この地での開催を推進したという³³。経済発展が遅れている中西部地域の開発を国が推進していたことも、この決定を後押しすることとなった³⁴。

新たな候補地となった昆明市は、三方を山に囲まれた標高約 1900 m の高原にあり、一年を通じて春のような気候であることから「春城（春の都）」とも称される都市である。その主要産業は、1980 年代後半まで野菜やタバコであったが、改革開放の影響もあり、次第に換金性の高い花卉栽培に着手する農家が増え始め、それと共に市内のあちこちに花市場が開設されるようになったという歴史をもつ³⁵。その結果、昆明園芸博開催時には、この昆明市と斗南村を中心に、雲南省が中国の花卉生産のシェア 50 ～ 60 パーセントを占めるまでに成長していた³⁶。園芸産業の急速な発展を背景に、市民の花に対する関心も高まっていたという³⁷。

会場はこのような昆明市の北部郊外、名所旧跡が散在する景勝地に連なり、採石場、煉瓦製造所、ゴミ捨て場として利用されていた荒れ地約 218ha に設定された。その後、1997 年 5 月末の着工から 2 年足らずの短期間でこの地のランドスケープは完全に変容し³⁸、76.7 パーセントが緑で覆われた³⁹ 大阪花博の約 2 倍の広大な敷地を基盤に、「花」をメインにしたダイナミックで色彩豊かな空間が出現する。会場敷地の地形を生かしつつ花や緑を充実させていくその土地造成に際しては、大阪花博をモデルにしたという⁴⁰。しかしそのスケールは大阪花博のそれを遥かに超えており、特に国内外の貴重種 112 種を含む 2000 種余り、計 40 万株の植物が導入されたことは特筆に値する。その大部分は世界的な植物の宝庫として知られる雲南省の各地から移植したものであり⁴¹、中国の、特に雲南省の生物資源の多様性と豊かさをアピールする結果になった。開催後の会場跡地は、ほぼそのまま公園として利用されており、大温室等のパビリオンやモニュメントも変わらず継承されている⁴²。

この昆明園芸博が地域にもたらす効果として、博覧会当局は以下の 5 点を挙げていた。

- ①雲南省の対外開放の推進
- ②雲南省の主要産業（農業・観光業）の発展。ならびに生物資源や観光資源の開発促進
- ③雲南省の持続可能な発展戦略の実施が確固たるものになる
- ④昆明市のインフラ建設の推進
- ⑤雲南省の各民族、各界人民の愛国心が鼓舞され、その「精神文明」の水準が引き上げられる。

歴史学者の柴田哲雄は、②の効果が特に重視されていたことを明らかにし、市街地のウォーターフロント再開発計画と連動して開催された2010年の上海万博とこの昆明園芸博が、「上からの開発主義の産物」という点で共通していると指摘している⁴⁴。確かに柴田が指摘する通り、昆明園芸博は、先述したようなその背景からして明らかに「開発主義の産物」である。ただしそれは自然に対置する従来型の開発ではなく、自然と共生する新しい開発のありかたを強く意識したものであった。

近年の中国では、改革開放政策による急速な経済発展を背景に、特に1990年代後半から社会基盤整備、都市開発、住宅開発など各種開発事業が隆盛を極めている。その一方で、特に都市部を中心に大気汚染、水質汚染に代表される環境問題が深刻化しており、環境保護政策等の保全整備が破壊のスピードに追いつかない状況である。ここで注目されているのが、環境配慮型の新たな開発手法の検討である。特に2000年代に入り「生態庭園」や「生態マンション」といった環境配慮を押す空間デザインの手法・用語が頻繁に使用されるようになった。現在も、各地で大規模な都市開発、住宅地開発、博覧会、リゾート開発などプロジェクトが目白押しの状態だが⁴⁵、北京の都市開発が環境配慮上、全面的見直しを迫られるなど、その手法には確かに変化がみられつつある。

このような状況のもと、昆明園芸博が目指したのもまた大阪花博と同じく、自然と共生する社会の理想像をいかに演出し展示するか、であった。その会場自体が、博覧会の開催により荒れ地を美しく緑化したものであることにも、その性格は顕著に現れている。鮮やかに彩られた会場では、バイオな

ど最新の技術や園芸技術と共に環境保護の取り組みが紹介され、会期中に開催された日中間での国際シンポジウム「人と自然－造園、園芸、資源植物」⁴⁶ 造園セッションにおいても、「環境緑化」をテーマとして活発な意見交換がなされた。すなわち昆明園芸博でも、自然に対しては理想的な都市環境の調整装置としての意味合いが強く、この意味においては、記号化された「自然」が意識されていると指摘できる。ただし一方で、その開催地域の雲南省が世界的な植物の宝庫であり、会場に導入された植物の多くが当該地域由来であること、さらに、まだ歴史は浅いとはいえ、昆明市では急速に発展してきた花卉園芸産業を背景に、花が市民の生活のなかに浸透しつつあることから、その「自然」は、大阪花博のケースに比すると身近な存在でもあったと指摘できる。昆明市は、この園芸博開催を機に花のまちづくりを推進、今ではビルの窓や歩道など、街のいたるところに年中花や緑が絶えない街となっており、「花城（花の都）」ともよばれているという⁴⁷。

表7に示すように、中国はこの昆明園芸博開催を契機に、2006年瀋陽、2011年西安とA2/B1クラスの国際園芸花博が開催されている。この開催地となった瀋陽と西安の両都市は、いずれも「生態都市」を基本理念とした新しい都市開発を目指している点で共通している。瀋陽は2004年に「国家環境保護モデル都市」として認定された実績をもち、さらにその延長上に「国家園林都市」の称号を狙い緑化政策に力を入れつつある⁴⁸。瀋陽のような北

表7 中国 A2,B1,B2「国際園芸博覧会」概要

名称	中国瀋陽世界園芸博覧会	西安世界園芸博覧会
会期	2006.5.1-10.31(184日)	2011.4.28-10.22(178日)
メインテーマ	自然との調和、共存	天人の長安、創意の自然 ～都市と自然の調和・共生～
入場者実績	約1260万人	—
会場	中華人民共和國遼寧省瀋陽 棋盤山国際風景観光開発区	中華人民共和國陝西省西安遼寧生態区
敷地面積	約246ha	約418ha
敷地概況	省級の観光開発予定地「棋盤山国際風景観光開発地(企画面積20,300ha)」中心部。 既存の「瀋陽植物園」+未開発区域	もとは砂利採取場。 2004年～生態型都市新区「西安遼寧生態区」開発
跡地	棋盤山国際風景観光開発地「世博園区」の 「世界園芸博覧会(約218ha)」	—
運営主体	主催:遼寧省政府、中華人民共和國建設部、 中華人民共和國商業部、中国国際貿易 促進委員会、中国草花協会等 実行:瀋陽市政府	主催:陝西省政府、国家林業局、 中国貿易促進会、中国花卉協会 実行:西安市政府

方都市は緑が少なく、水資源が乏しいという性格をもつが、2000年以降の4年間で緑地面積を54.18㎡増加させており、これはそれまでの375年間の緑化面積の1.13倍に相当する量だという⁴⁹。西安でも、2004年に生態系管理と都市建設の有機的結合を掲げた「西安滻灞生態区」という新しい環境配慮型都市開発のモデル地区を設定し、河川流域の生態系保全・管理と新たな都市インフラの建設を両立させるための様々な取り組みを展開中である⁵⁰。

このような状況の両市において、園芸博の会場に設定されたのは、今後さらなる開発が予定されているエリアであり、その会場造成自体が自然と共生する新しい開発のあり方を実践・宣伝する意味を付与されていたとみなすことができる。他国の園芸博に比べて圧倒的なスケールを誇っているのも、そのひとつの表れであろう。ここでの「自然」とは、花も緑も水も全て含む総体であり、守るべき「環境」のいわば代名詞である。ただし特筆すべきは、あくまで開発を前提としている点であり、新たな開発手法の理念と共に自然が意識されている点である。中国では、この後も2014年に青島、2016年に唐山と、続々とA2/B1クラスの国際園芸博の開催が予定されているが、頻繁に広大なスケールで自然と共生する新しい開発の実践例を国内外に宣伝することにより、環境汚染大国のイメージを払拭する効果が期待されていると考えられる。

（2）島と都心部での開催－韓国、台湾

表8に示すように、韓国では2000年と2009年に、いずれも安眠島という島でA2クラスの国際園芸博が開催されている。開催地である「安眠島」は、鳥や動物が安心して横になって休むことができるというその名の由来の通り、古来より自然豊かな土地として知られ、韓国唯一の海岸国立公園に指定されている。朝鮮王朝時代、王朝の建築用材と船の建造用紅松を調達する国有林として管理されていた歴史を持ち、現在も鬱蒼とした森が茂っており、特に浜辺には世界的に珍しい「安眠松」という松が群生している。会場に設定されたのは、そのような松が群生している自然休養林から海に面したコッチ海水浴場までの間のエリアである。会場への出入り口が海水浴場に設けら

特集 変貌するアジアと観光

れ、鮮やかな花により彩られた場内を、展示館を経て樹木園に行けば、そのまま背後の自然休養林に通じる、という動線が組まれた。

開催の背景には、国を挙げて進めている「観光立国」政策が大きく影響している。「韓国訪問の年」と設定した2001年以降、韓国では観光振興を意図した大イベントが続々と企画・開催され始めた⁵¹。2001年には世界島文化フェスティバル（済州道）、世界陶磁器エキスポ（京畿道）、世界料理文化フェスティバル（全羅南道）等、2002年にはワールドカップサッカー大会（ソウル特別市他九都市）やアジア競技大会（釜山広域市）等と、種類も場所も実

表 8 韓国 A2,B1,B2「国際園芸博覧会」概要

名称	安眠島国際花博覧会2002	安眠島国際花博覧会2009
会期	2002.4.26-5.19(24日)	2009.4.24-5.20(27日)
メインテーマ	花と新しい文明	花、海そして夢
入場者実績	約164万人	約200万人
会場	大韓民国忠清南道泰安郡安眠島 コッチ地区・樹木園地区	大韓民国忠清南道泰安郡安眠島 コッチ地区（海岸公園）・樹木園地区
敷地面積	約79ha	約79ha
敷地概況	コッチ海水浴場から 近郊の樹林地（自然休養林）にかけての一带	「安眠島国際花博覧会2000」跡地 2007海洋オイル流出事故による被害あり
跡地	「コッチ海岸公園（約49ha）」「自然休養林」	2015年まで「コッチ海岸公園」を花テーマパークとして活用。その後2016年から「安眠島国際観光地」の中心地区として本格開発予定。
運営主体	主催：忠清南道・忠清南道開発公社 主観：財団法人安眠島国際花博覧会組織委員会 （忠清南道と忠清南道開発公社の共同出資）	主催：忠清南道・忠清南道開発公社 主観：財団法人安眠島国際花博覧会組織委員会 （忠清南道と忠清南道開発公社の共同出資）

に多様である。その一環として企画されたのが、この「安眠島国際花博覧会2002」であった。開催地の安眠島は、先述したような自然の豊かさから、既に韓国有数の避暑地として知られており、年間400万人の観光客が利用する場所である⁵²。なかでも会場に設定されたコッチは、最も人気を集める場所のひとつであった。このような既に観光地として十分な機能をもつ空間に、「花」という国際的に需要の高い素材で彩りを加えることで、より国際的に通用する一大観光地へと発展させることを期待したのである。安眠島の気候と土壌が花の育成に適していたという事実も、この実現を後押しした。

花博開催後の跡地は、全体の長期的な観光開発計画のなかで、しばらく花のテーマパークとして保全・活用され⁵³、この地に新たに導入された「花」は、安眠島のひとつの代名詞になっていく。しかし、2007年12月に発生した海

への油流出事故の影響で、安眠島を含む泰安地域全体の観光利用が低調となる⁵⁴。その状況を打開するため、2002年の花博を再現し、さらに汚染のイメージを払拭すべく「海」に関する内容も加味したものが「安眠島国際花博覧会2009」であった。すなわち、これらの国際園芸博においては、既存の自然「環境」である海も、国際園芸博のメインとして新たに導入された自然「素材」である花も含め、専ら国内外に通用する有力な「観光資源」として自然が意識されていると指摘できる。

表9に示すように、台湾では、2010年に、台北市でA2/B1クラスの国際園芸博が開催されている。これは、台湾で初めて開催される国際博覧会であると共に、東アジアでは初めて都市「中心部」で開催される国際園芸博であった。会場に設定されたのは、既に台北市民の休憩所として親しまれている公園や美術館といった既存の公共施設を中心とする4つのエリアであり、散在した会場はペDESTリアンデッキや花のトンネルで結ばれた。設計理念とし

表9 台湾 A2,B1,B2「国際園芸博覧会」概要（その3）

名称	台北国際花卉博覧会
会期	2010.11.6-2011.4.25(171日)
メインテーマ	彩花、流水、ニュービジョン
入場者実績	約900万人
会場	台湾台北市 圓山公園・新生公園・美術公園・大佳河濱公園地区
敷地面積	約92ha
敷地概況	基隆河流域の岸辺に広がる台北市中心地 公園・美術館・遊園地等が集積
跡地	公園として整備(再利用)
運営主体	台北市

ては以下の3つが意識されており⁵⁵、

- ①園芸、ハイテク、環境保護に関する技術の結集。
- ②二酸化炭素排出量の削減、及び3R(Reduce, Reuse, Recycle)の環境保護目標の達成。
- ③文化とアートと結合させたグリーンな生活。

1ヶ月ごとに植えかえられる1,600種類、3,000万株もの華やかな花に彩られた場内では、再利用したペットボトルと竹を組み合わせた建築や巨大なプラスチック製の花など、「環境」をテーマにした種々のハイテク展示物が人気を集めた。開催後はいずれも再整備され、再び市民の利用に供されている。

このような台北花博開催に期待される効果について、運営主体である台北市、なかでも中心的役割を担った産業發展局は、以下のように述べている。

花博の開催により、主催国の園芸農業の成熟度と国際的大型イベントの企画力が証明される。光栄にも、2010台北国際花博覧会開催のチャンスに恵まれ、この一大イベントの洗礼を経て、公共施設と社会基盤を改善し、市民の環境に対する意識を高める機会が台北に与えられたとともに、台湾と周辺国家の園芸農業、観光旅行業、飲食業、バイオテクノロジー産業にもレベルアップの新たな契機が与えられ、国内外の経済活動をより盛り立てられると期待される⁵⁶。

さらに2011年3月28日付の東京新聞に掲載された、当時の江啓臣・行政院新聞局長の寄稿には、次のような記述がみられる。

台湾は長きにわたり国際社会で、ハイテクと経済發展のイメージが強く、環境保護や芸術面ではあまり知られていませんでした。今回の花博でソフトパワーを活用して台湾文化の發展の成果を示すこともできたと思います⁵⁷

ここから読み取れる花博への期待は、経済・産業振興、既存の都市インフラの充実、そして何よりも台湾の文化力のPRである。すなわち台北花博では大阪花博と同じく、理想的な都市環境の調整装置、かつ都市生活における貴重な文化装置として自然が意識されているが、特に後者の意識が強いと指摘できる。環境保護という国際的課題をテーマに、いかに高い技術力と芸術的センスを用いて優れた作品をつくりあげるか、これが重視された結果、先述したような姿になったのであろう。台北花博における自然とは、環境をテー

マとした芸術作品の「素材」であったともいえる。

このような捉え方には、台湾における一般的な「花」に対する認識も大きく影響していると考えられる。台湾は、年間 6000 万株の出産高がある世界有数の花の生産国であり、古くから市民の生活において花見や花摘み、フラワーティーなど、多様な形で花が使用されてきた。特に、亜熱帯に属する盆地で自然条件が植物の栽培に適した台北市は、「花園都市」とも称され、これまで陽明山フラワーフェスティバル、つつじ祭り、カラーフェスティバル等、様々な花イベントが開催されてきた。すなわち「花」は、この地域の人々にとって自然的存在というより、むしろ文化的存在として認識されており、自然環境やそれに対する保全意識より、芸術文化の要素として捉えることのほうがしっくりとくるのではないかと推測される。そのことが、花博のあり方にも反映されていたのではないだろうか。

(3) 自然観と規模の変遷—日本

ここで最後に、再び日本に立ち返って考えてみたい。日本では、大阪花博以降、表 10 に示す 3 つの小規模な国際園芸博が開催されている。このうち淡路花博は A2/B1 クラス、浜名湖花博と浜名湖フラワー＆ガーデンフェア 2009 はいずれも B2 クラスに該当する。

2000 年開催の淡路花博は、1992 年策定の「淡路公園島構想」およびそれを担って 1993 年からスタートした「淡路島国際公園都市」整備の一環として企画されたものである。この「淡路公園島構想」は、環境破壊を伴う従来の土地開発を抜本的に見直し、自然環境と調和した「環境保全」型の開発にシフトしたものである。その構想を先導する北淡路地域の拠点として既存の「県立淡路島公園」に加え、「国営明石海峡公園」、複合文化リゾート施設「淡路夢舞台」等から構成される面積約 350ha「淡路島国際公園都市」整備が計画された。敷地の大半が関西国際空港をはじめとする大阪湾岸域の埋め立てに使われた土砂採取跡地であり、最大標高差 100m に及ぶ岩盤が露出した斜面地であった。整備にあたってはまずこの土地を全面的に緑化し、「国際公園都市」の名に相応しい、かつ開催が決定した花博の背景にも相応しい新たな

表 10 日本 A2,B1,B2「国際園芸博覧会」概要

名称	淡路花博	浜名湖花博
会期	2000.3.8-9.18(184日)	2004.4.8-10.11(187日)
メインテーマ	人と自然のコミュニケーション	花・緑・水～新たな暮らしの創造～
入場者実績	約694万人	約545万人
会場	兵庫県淡路島(淡路町・東浦町)	静岡県浜松市庄内地区
敷地面積	約96ha	約56ha
敷地概況	大阪湾埋め立ての土砂採取跡地 「淡路国際公園都市(約350ha)」計画地	浜名湖畔の浜名湖を埋め立て造成した農地
跡地	国営明石海峡公園(淡路地区)、 複合文化リゾート施設「淡路夢舞台(約28ha)」、 一部更地(利用検討中、宅地開発予定)	県営都市公園「浜名湖ガーデンパーク(約56ha)」
運営主体	ジャパンフローラ2000日本委員会、 財団法人夢の架け橋記念事業協会 (兵庫県外郭団体)	財団法人静岡国際園芸博覧会協会(静岡県主導)

名称	浜名湖フラワー & ガーデンフェア 2009
会期	2009.5.1-5.10(10日間)
メインテーマ	花と緑、生活文化の芽吹き ～暮らしの花、生活の緑～
入場者実績	約19万人
会場	静岡県営都市公園「浜名湖ガーデンパーク」 (浜松市庄内地区)
敷地面積	約56ha
敷地概況	「浜名湖花博」跡地
跡地	現状維持(「浜名湖ガーデンパーク」)
運営主体	浜名湖フラワー & ガーデンフェア2009実行委員会 (静岡県主導)

なランドスケープを創出することが急務とされた⁵⁸。

1994年に始まったこの緑化事業は、塩風や強風、岩質、夏季の乾燥など決して良好とはいえない自然条件で、周囲の山々と調和する「ふるさとの森」の景観を短期間に育成するという大変困難なものであった。しかし、最大限の技術を駆使し、花博が開催する2000年3月には完成する⁵⁹。このように、新たな開発の一環として、瀬戸内海域の環境破壊の代表的存在でもある広大な土砂採取跡地を緑地に変貌させたことが、大阪花博との最も大きな相違点であり、この花博の特徴と指摘できる。一方で、場内に新たに導入された花の数は150万株と、大阪花博の370万株より少なく、色鮮やかな「花」という印象は大阪花博ほど強くなかった⁶⁰。すなわち淡路花博における「自然」は、1990年代に入り広く国際的に認知されるようになった「持続可能な開発」という理念⁶¹を背景に、特に環境保全の代名詞的存在である「緑化」と強

く結び付いていることが指摘できる。

一方、2004年に開催された浜名湖花博は、AIPH承認の「国際園芸博覧会」であると同時に、1983年の大阪開催以来、毎年全国各地を巡回し開かれている国土交通省関連の「全国都市緑化フェア」⁶²という性格を併せ持つ。会場に設定されたのは、浜名湖を埋め立て造成した平坦な農地であり、地下水位が高く、夏には南から、冬は北西の強風が吹く、植物の生育に良好とはいえない環境であった。そのような敷地を、500万株という国内では記録的な数の花々で飾り⁶³、開催後はその主要景観を活かした県営公園「浜名湖ガーデンパーク」として人々の利用に供している。

このような浜名湖花博は、大阪花博とも淡路花博とも異なり、「園芸文化」、特に日本の園芸文化の再発見を全面に押し出した内容であった。場内では日本の園芸文化の歴史を、これまでの園芸博のなかで最も焦点を当て紹介すると共に、消費者が生活に導入し得る園芸植物を、栽培方法や購入方法と共に展示するなどの試みがみられた。開催地となった静岡県は、花卉産業全国3位という土地柄であり、特に会場が置かれた西部地域は、愛知県東部地域や長野県南部地域と共に、全国有数の花卉と樹木の生産地である⁶⁴。しかし、その消費はあまり芳しくなく、生活文化として捉えていない状況にあった。このような状況への問題意識が根底にあり、「園芸文化」を軸に、歴史と、現在の生活・生業に根差した身近な「自然」への意識を喚起させようとしたのが浜名湖花博である。その跡地では、この理念を継承すべく種々の園芸文化に関するイベントが引き続き開催され、浜名湖フラワー＆ガーデンフェア2009は、その記念碑的な意味をもつものであった。

4. おわりにー「国際園芸博覧会」の未来

以上、1990年の大阪花博以降、日本、中国、韓国、台湾と、東アジア諸国で続々と開催されるようになった国際園芸博覧会の実態を、博覧会開催前後のランドスケープの変貌（特に自然環境の変化）に焦点を当てて考えてきた。そこに、各々の自然観が表出しているからである。

日本のケースを通覧すると、最初の大阪花博は、開発至上主義による環境

問題が顕在化してきた時代状況のもと、当時の行政がイメージする理想的な環境配慮の形が象徴的に映し出される空間となり、そこで意識されていた自然は理想的な都市環境の調整装置、かつ都市生活における貴重な文化装置としての記号であったことが確認できた。次いで開催された淡路花博における自然意識は、溢れんばかりの花で鮮やかに飾るよりも、国際的に認知されるようになった「持続可能な開発」という理念を背景に、特に環境保全の代名詞的存在である「緑化」と強く結び付いていた。さらに続く浜名湖での2つの花博は、いずれも「園芸文化」を軸に、歴史と現在の生活・生業に根差した身近な自然が意識されていたことが明らかになった。そして同時に、そのスケールが次第に小規模なものになっていることも指摘できる。

一方、今後も開催予定が目白押しである中国の国際園芸博では、そのいずれもが、あくまで大規模な「開発」を前提に、最大限配慮し保全すべき環境の代名詞として自然が意識されていることが明らかになった。そして、開催地において比較的身近な存在である花をメインとした昆明園芸博の開催以降、その傾向はむしろ強まってきており、他国よりも圧倒的なスケールで展開される会場の造成自体が自然と共生する新しい「開発」のあり方を実践・喧伝する意味を付与されていることも指摘できる。従って、広大なスケールで頻繁に国際園芸博を開催する背後には、環境汚染大国のイメージを払拭する効果が大いに期待されていると考えられる。

韓国では、いずれも同じ安眠島を舞台に開催されており、国を挙げて推進している「観光立国」政策を背景に、既存の自然環境である海も、新たに導入された素材である花も含めた自然が、専ら国内外に通用する有力な「観光資源」として意識されていると指摘できる。

台湾では、理想的な都市環境の調整装置、かつ都市生活における貴重な文化装置として自然が意識されているが、自然的存在というよりむしろ文化的存在として認識されている花が主役であったこともあり、特に後者の意識が強いと指摘できる。換言すると、環境保護という国際的課題をテーマにした芸術作品の素材としての性格が強かったといえよう。

国際園芸博覧会は、自然を主題とするその特殊性ゆえに、環境配慮の必要

性が求められる今の時代状況では、一般的な博覧会よりむしろ肯定的に捉えられやすい。しかし、その実態が、開催国、さらに開催地域の風土とそれに培われた文化に根差したものかといえ、東アジア諸国に限っていえばそれは異なる。その表れ方は様々だが、いずれも現今のグローバルな環境問題をどう捉えるか、という各国の姿勢が表出した空間として機能していることが指摘できる。この傾向は、「国際園芸博覧会」が人々の生活に強く根差した花の文化の延長線上に誕生し、いわば「日常におけるハレの空間」として位置づけられる西欧よりも、1990年代からそれに倣って開催するようになった東アジア諸国のほうが顕著にみられるのではないか。これらの国々における、小規模かつ伝統的な国内園芸博（的空間）の実態分析も含め、その捉え方の解明については今後の課題としたい。

補注・文献

- 1 なお表には掲載されていないが、イギリスのチェルシーフラワーショーなども実質上「国際園芸博覧会」に該当する博覧会であり、これもまた連続性・周期性をもつ
- 2 例えば吉見俊哉（1992）：博覧会の政治学：中公新書、吉田光邦（1985）：改訂版 万国博覧会－技術文明史的に：日本放送出版協会、吉田光邦編（1986）：万国博覧会の研究：株式会社思文閣出版等
- 3 防空に資する目的で設置・整備された映像物の公園緑地（東京農業大学造園科学科編（2002）：造園用語辞典第二版：彰国社）
- 4 丸山宏（2007）：博覧会とランドスケープ：環境デザイン学－ランドスケープの保全と創造－、株式会社朝倉書店、61pp
- 5 ひとつの市町村の区域を超えた地域住民の休息・観賞・散歩・遊戯・運動等の総合的な利用に供することを目的とする都市公園（東京農業大学造園科学科編（2002）：造園用語辞典第二版：彰国社）
- 6 当時の鶴見緑地建設事務所が発効した「鶴見緑地の案内」には、以下のよう記述がみられる
鶴見緑地は人と自然のふれあいを大切にした公園です・春のタンポポ、秋のどんぐりなど、野の草花や木の実、そして水を求めて飛来する野鳥、魚、昆虫たち…。コンクリート・ジャングルでは味わうことのできない、本物の野生にふれて、心もからだもリフレッシュしてみませんか
- 7 大阪市（1991）：国際花と緑の博覧会と大阪市：大阪市、49pp
- 8 前掲7、46pp

- 9 前掲7、46pp
- 10 前掲7、52pp
- 11 前掲7、52pp
- 12 1984年建設省（現国土交通省）のとりまとめによる報告書『21世紀「緑の文化」形成を目指して』のなかで、「緑の国際フェスティバル」の開催が提案されている
- 13 大阪府（1991）：自然と人間の共生－国際花と緑の博覧会大阪府公式記録－：大阪府、3pp
- 14 「国際博覧会」としてBIEの承認を得るためには、同一国での特別博覧会の開催に5年の間隔が必要だが、既に1985年に国際科学技術博覧会（科学万博、つくば'85）を開催することが決まっていたため
- 15 この点に関しては現時点では推論の域を出ず、今後の調査が必要である
- 16 前掲7、58pp
- 17 会場基本計画（1987年策定。会場計画委員会・委員長：足立孝大阪大学名誉学長）においてその旨明記されている
- 18 清水正之（2000）：博覧会の効用と公園緑地の形成：ランドスケープ研究64(1)、11pp
- 19 1988年に発足（会長：足立孝大阪大学名誉教授）。1990年4月に提言がなされた。
- 20 開催中の1990年9月に第1回懇親会を開始（会長：佐治敬三大阪商工会議所会頭）。同年12月、建設大臣と農林水産大臣に報告書が提出された。
- 21 「鶴見緑地みらい計画懇話会」における「鶴見緑地再整備の理念と目標」にその旨明記されている。
- 22 「国際花と緑の博覧会基本理念継承懇談会報告」における「2. 基本的な施策の方向（4）「花の万博の基本理念を継承する公園としての鶴見緑地の活用」より抜粋（前掲13、293pp）
- 23 前掲7、47pp
- 24 山本紀久（1990）：造園家が見た花と緑の博覧会：緑の読本、27-28および前掲18、7-9
- 25 白幡洋三郎（2000）：庭園の美・造園の心：日本放送出版協会、49-65
- 26 中尾佐助（1986）：花と木の文化史：岩波新書、128pp
- 27 ただし、この開催を契機に日本で新たなガーデニングブームが到来したという説もあり、開催「後」の文化的影響に関しては検討が必要である。
- 28 低湿地という自然環境に根差し、レンコンやクワイ等の畑地利用が盛んであった
- 29 吉見は戦後開催された一連の万博および地方博を貫く「万博幻想」について、以下のように定義している。
60年代の「所得倍増＝地域開発」の流れを受けながら、一方では、高度成

長の成果たる一人ひとりの豊かさを、氾濫する未来イメージのなかで自己確認させる場所として『万博』を機能させ、他方でそのような『未来』への信憑にもとづいて国家予算の投下を可能にして、周辺の地域開発を進めていく言説＝戦略上の仕組みである。

(吉見俊哉 (2005)：万博幻想－戦後政治の呪縛：ちくま新書、33pp)

- 30 前掲28、30pp
- 31 前掲28、30-32
- 32 実質的な開催の契機となった大阪市の市制100周年記念事業の基本構想では、目指すまちの姿として「美しくうおいのあるまちをつくる」「豊かな文化をつちかうまちをつくる」といった表現が使用されていた。また、大阪花博実現の背景には、先述した国の「緑の三倍增構想」に加え、大阪市が1964年に発した「大阪緑の100年宣言」に基づき推進中の公園・緑化事業や、大阪府における同様の取り組み（1986～1995を大阪みどりの10年と位置づけ、身近な緑の充実、みどり景観・ゆとりの空間の創出、親水空間の拡充、周辺山系の保全の4本柱を推進）があったが、いずれもこれと同様の目的意識を有するものと捉えられる。
- 33 菅納ひろみ (1999)：現地視察レポート 期待が高まる中国初の国際博覧会「中国'99昆明世界園芸博覧会」：日中経協ジャーナル1999.3、81pp
- 34 1997年に開催された中国共産党第15回全国代表大会では、中西部地域の開発の推進が決議されている（柴田哲雄 (2010)：中華人民共和国・改革開放路線期：中国昆明世界園芸博覧会と中国2010年上海万国博覧会：成文堂、61pp)
- 35 井上繁 (2002)：花き栽培がきっかけで花のまちづくり 昆明市（中国）－中国初、世界園芸博覧会の会場に：地方財務No.572、309pp
- 36 儀間礼乃 (2005)：中国'99昆明世界園芸博覧会を視察して：熱帯植物調査研究年報、49pp
- 37 前掲25、307pp
- 38 王燕娟 (1999)：人と自然が調和して共存：北京週報No.22、22pp
- 39 前掲26、50pp
- 40 都市緑化技術 昆明園芸博－中国西南地区の歴史と植物の出会い
- 41 前掲28、24pp
- 42 前掲25、308pp
- 43 雲南省園芸博覧局編 (1999)：園芸博覧 世紀盛会－中国'99昆明世界園芸博覧会：中国旅游出版社、15-17
- 44 前掲24、74pp
- 45 ランドスケープデザイン編集部編 (2005)：特集 躍動する中国のランドスケープ：ランドスケープデザインno.40、6pp
- 46 博覧会の趣旨に沿った学術交流を促進することにより、21世紀の「人と自

然のあり方」を探る機会として実施されたもの。開催されたもの。事務局が(財)国際花と緑の博覧会(日本)と中国科学院昆明植物苑(中国)に置かれ、造園・資源生物・園芸の3つのセッションが企画された。(浅川昭一郎(1999)中国'99昆明世界園芸博覧会国際シンポジウム(造園セッション)報告:ランドスケープ研究63(2)、162-163)

- 47 前掲25、308-309
- 48 2006中国瀋陽世界園芸博覧会準備事務局瀋陽市人民政府ニュース事務局:瀋陽の明日-緑の“生態都市”:2006中国瀋陽世界園芸博覧会公式HP
<<http://www.expo2006sy.gov.cn/page-r/news08.html>>、2011.8.10参照
- 49 前掲48
- 50 2011西安世界園芸博覧会準備委員会事務局:2011西安世界園芸博覧会の主催地-西安滻灞生態区の概要:2011西安世界園芸博覧会公式HP
<<http://jp.expo2011.cn/2010/1102/2491.html>>、2010.11.2更新、2011.8.10参照
- 51 財)自治体国際化協会ソウル事務所:「東洋の真珠」安眠島で開かれる2002年国際花博覧会:自治体国際化フォーラム公式HP
<<http://www.clair.or.jp/j/forum/forum/articles/jititai/143/INDEX.HTM#top>>2011.8.15参照
- 52 前掲51
- 53 2009.5.21中央日報:花博覧会を終えた泰安、緑色観光メッカへ
- 54 2008.1.19中央日報では、「西海岸全体が長期不況の危機…観光客7割減」という記事で、泰安油流出事故で西海岸を訪れる観光客が減り、水産物忌避現象がみられる現況を報道している。
- 55 臺北市政府産業發展局:花博の理念:2010臺北国際花卉博覧会公式HP
<<http://www.2010taipeiexpo.tw/ct.asp?xItem=1722&ctNode=6074&mp=6>> 2008.11.21更新、2011.8.12参照
- 56 前掲56
- 57 2011.3.28東京新聞(夕刊):一季節を彩る-花物語、台北花博 環境保護を重視し展示
- 58 石灰岩の採掘跡地を世界的に有名な庭園として蘇らせたカナダ・ビクトリア市のブッチャート・ガーデンを範としたという
(貝原俊民(2000):21世紀・環境の世紀に向けて-淡路島国際公園都市の整備および淡路景観園芸学校の創設など「緑」政策推進と今後の方向-:ランドスケープ研究64(1)、41-42)
なお、土砂採取前には、ゴルフ場としての跡地利用計画が提出されていた。
(石原憲一郎(2000):淡路公園島づくり-淡路花博の果たす役割-:ランドスケープ研究64(1)、22pp)
- 59 井上芳一(2000):岩盤斜面地の再生緑化-淡路花博の「地」の緑化手法に

ついてー：ランドスケープ研究64(1)、31-32

- 60 会場のランドスケープ計画に携わった井上芳治は、この理由として「阪神・淡路大震災の影響などが不況・財政難等々から、あふれんばかりの花々ではなく、花や緑の生命感を重視し、自然の持つ生命力を感じられるよう個々の植物に配慮することに重点をおいた」と述べている。
(井上芳治(2000)：淡路花博会場とランドスケープ：ランドスケープ研究64(1)、25pp)
- 61 環境と開発は不可分の関係にあり、開発は環境や資源という土台の上に成り立つものであって、持続的な発展のためには、環境の保全が必要不可欠であるとする考え方を示すもの。1980年に国際自然保護連盟(IUCN)、国連環境計画(UNEP)などがまとめた「世界保全戦略」に初出した概念で「持続可能な発展」とも訳される。
- 62 ヨーロッパの伝統ある園芸博覧会、特に西ドイツにおいて開催されていた連邦園芸博覧会(BUGA)に影響を受け、全国持ち回りの形式で、花と緑に関するイベントを毎年開催することとなった。(財)都市緑化機構と開催地の地方自治体との共同開催で、浜名湖花博で第21回目。
- 63 会期中の植え替えを通しての合計ゆえ、実際にはこれよりも数が増加。通常の「全国都市緑化フェア」が2ヶ月で100万株、大阪花博は6ヶ月で370万株、淡路花博は6ヶ月で150万株ゆえ、その差は明らかである。
(賀来宏和(2004)：プロデューサーに聞く浜名湖花博②：記録的な花の数への挑戦：ランドスケープデザインno.37、20-21)
- 64 賀来宏和(2000)園芸博覧会と時代創造：ランドスケープ研究64(1)、36-37